

# 教育実習と関連科目の指導に関する考察

## —実習日誌と評価表との比較・分析—

徳 永 博 仁

第一工業大学 準教授 共通教育センター

(〒899-4395 鹿児島県霧島市国分中央 1-10-2)

E-mail:h-tokunaga@daiichi-koudai.ac.jp

21世紀という新しい時代に生きる子どもたちを心豊かに育てることのできる優れた資質能力と実践的指導力を有する教員が、強く求められている。学校教育の直接の担い手である教員の活動は、子どもの心身の発達にかかわるものであり、児童・生徒の人格形成に大きな影響を及ぼすものである。このような専門職としての教員の職責にかんがみ、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が必要である。

本学の「教育実習」を中心とした「事前・事後指導」などの関連科目や教職課程の他の科目との連携した取組について、養成段階での課題や成果を、「教育実習日誌」などを参考に考察する。

Keywords: 求められる教師像、資質能力、実践的指導力、養成段階、教育改革

### 1 はじめに

本学は、航空工学科、情報電子システム工学科、機械システム工学科、自然環境工学科、建築デザイン学科の工学部のみを置く大学である。

筆者は、教職課程の「工業科教育法」「教育実習」「事前・事後指導」を担当している。取得できる教員免許の種類は、学科によって異なるが、中学校教諭一種免許状（技術・数学）、高等学校一種免許状（工業・数学）である。

入学してくる学生の内、教職を希望する者は、地元鹿児島県をはじめ九州各県から進学してくる。その大半が、普通科のある高校からの学生であるが、例年2割近くの学生が工業科のある高校から進学し

ている。部活動経験者も多く、野球部、ソフトボール部、陸上部、サッカー部など体育系が多く、大学でも引き続きサークル活動で活躍している。高校での部活動未経験者も大学入学後は、学友会、ボランティア活動、沖縄郷土芸能部など何らかのサークル活動に所属している。明るく活動的な学生が多い。

教員を目指す動機も、中学・高校時代の恩師との出会いをあげる者が多いが、部活動顧問の精神的な指導に刺激を受け指導者になりたいと志す者や不登校の経験がありそれを救ってくれた恩師に影響を受け教員を目指す学生もいる。

教職に就いた卒業生は、過去5年間で振り返ると、毎年3人から7人の者が期限付き教諭や実習助手と

して頑張っている。本学では、全国各地で教員として活躍する卒業生の組織「教育会」を結成し支援している。研修の場となり情報交換の場ともなっている。毎年1名から2名の者が、採用試験を受け正式採用になっている。近年採用が、若干名と厳しい状況が続き、企業の好調な求人もあり、教職への希望者が少ない状況が続いている。

教員免許取得者数を年度別に人数を見てみると、平成25年度63名、平成26年度78名、平成27年度70名、平成28年度54名、平成29年度33名と減少傾向にある。2020年問題を控え、教育水準の維持向上のためにも、大学での「教科指導、生徒指導等に関する『最小限必要な資質能力』」の養成に努め教職課程の充実を図る必要があると感じている。

ここでは、教育職員養成審議会の第一次答申『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について』の「今後特に求められる資質能力」について、本学の「教育実習」を中心とした「事前・事後指導」などの関連科目や教職課程の他の科目との連携した取組について、本学の教職課程での課題や成果を、「教育実習日誌」などを参考に考察する。

## 2 教員に求められる資質能力

### 2-1 教員に求められる資質能力

#### (1) いつの時代も教員に求められる資質能力

中央教育審議会は、1996年(平成8)年7月に「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第一次答申)を発表した。その「第2部第1章 これからの学校の在り方 (2)新しい学校教育の実現のための条件整備等 [2]教員の資質・能力の向上」のなかで、これから求められる教員の資質・能力について説明している。

「・・・略・・・教員に強く要請される、[生きる力]をはぐくむ学校教育を展開するための豊かな人間性と専門的な知識・技術や幅広い教養を基盤とする実践的な指導力を培うためには、教員の養成、採用、研修の各段階を通じ、施策の一層の充実を図っていく必要がある。教員に求められる資質・能力については、学校段階によって異なるが、教員養成や研修を通じて、教科指導や生徒指導、学級経営な

どの実践的指導力の育成を一層重視することが必要であると考えられる。・・・略・・・」(中央教育審議会第一次答申より一部抜粋)と実践的指導力の育成の一層の重視を求めている。

この答申を受け教育職員養成審議会は、1997(平成9)年7月の第1次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」の提言の中で、「今後特に教員に求められる具体的資質能力」において具体的にその資質能力について述べている。

教員に求められる資質能力を「いつの時代も教員に求められる資質能力」、「今後特に教員に求められる具体的資質能力」、「得意分野をもつ個性豊かな教員の必要性」を上げている。

「いつの時代も教員に求められる資質能力」は、「専門的職業である『教職』に対する愛着、誇り、一体感に支えられた知識、技能等の総体」であり、「『素質』とは区別され後天的に形成可能なもの」であると提示している。

#### (2) 今後特に教員に求められる具体的資質能力

「今後特に教員に求められる具体的資質能力」については、上記の一般的な資質能力の上に、3つの具体的資質能力が求められていると提言している。

[参考図]今後特に教員に求められる具体的資質能力の例

#### 地球の視野に立って行動するための資質能力

地球、国家、人間等に関する適切な理解

例：地球観、国家観、人間観、個人と地球や国家の関係についての適切な理解、社会・集団における規範意識

例：人間尊重・人権尊重の精神、男女平等の精神、思いやりの心、ボランティア精神

国際社会で必要とされる基本的資質能力

例：考え方や立場の相違を受容し多様な価値観を尊重する態度、国際社会に貢献する態度、自国や地域の歴史・文化を理解し尊重する態度

#### 変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力

課題解決能力等に関わるもの

例：個性、感性、創造力、応用力、論理的  
思考力、課題解決能力、継続的な自己教育力

人間関係に関わるもの

例：社会性、対人関係能力、コミュニケーション能力、ネットワーキング能力

社会の変化に適応するための知識及び技能

例：自己表現能力(外国語のコミュニケーション能力を含む。)、メディア・リテラシー、基礎的なコンピュータ活用能力

**教員の職務から必然的に求められる資質能力**

幼児・児童・生徒や教育の在り方に関する適切な理解

例：幼児・児童・生徒観、教育観（国家における教育の役割についての理解を含む。）

教職に対する愛着、誇り、一体感

例：教職に対する情熱・使命感、子どもに対する責任感や興味・関心

教科指導、生徒指導等のための知識、技能及び態度

例：教職の意義や教員の役割に関する正確な知識、子どもの個性や課題解決能力を生かす能力、子どもを思いやり感情移入できること、カウンセリング・マインド、困難な事態をうまく処理できる能力、地域・家庭との円滑な関係を構築できる能力

「今後特に教員に求められる具体的資質能力の例」について、まとめると

- ① 地球や人類の的視野に立って行動するための資質能力
- ② 変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力
- ③ 教員の職務から必然的に求められる資質能力

これら3つのうち③については、さらに細かく求めている。

- (1) 幼児・児童・生徒や教育の在り方に関する

適切な理解

- 幼児・児童・生徒観、教育観（国家における教育の役割についての理解を含む。）
- (2) 教職に対する愛着、誇り、一体感
  - 教職に対する情熱・使命感、子どもに対する責任感や興味・関心
- (3) 教科指導、生徒指導等のための知識、技能及び態度
  - 教職の意義や教員の役割に関する正確な知識、子どもの個性や課題解決能力を生かす能力、子どもを思いやり感情移入できること、カウンセリング・マインド、困難な事態をうまく処理できる能力、地域・家庭との円滑な関係を構築できる能力

以上のように、それぞれの資質能力として具体的に例示している。

**2-2 大学の教職課程の役割**

**(1) 教員の資質能力の形成過程**

昭和62年答申で指摘されているように、「…教員としての資質能力は、養成・採用・現職研修の各段階を通じて形成されていくものであり、その向上を図るための方策は、それぞれの段階を通じて総合的に講じられる必要がある、教員の職責にふさわしい資質能力は、教員養成のみならず教職生活を通じて次第に形成されていくものである。」と述べている。

教員の資質能力は、養成段階を含め教員の生涯にわたり絶えずその向上が図られるべきものである。大学を中心とした教員養成の果たすべき役割を明らかにする観点から、養成・採用・現職研修の各段階の役割分担のイメージを以下に表している。

[参考図]教員の資質能力の形成に係わる役割分担のイメージ

**養成段階** 専攻する学問分野に係る教科内容の履修とともに、教員免許制度上履修が必要とされている授業科目の単位修得等を通じて、教科指導、生徒指導等に関する「最小限必要な資質能力」（採用当初から学級や教科を担当しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践



↓↑できる資質能力)を身に付けさせる過程。

#### 採用段階

開放制による多様な教員免許状取得者の存在を前提に、教員としてより優れた資質能力を有する者を任命権者が選考する過程。

#### 現職研修段階

任命権者等が、職務上又は本人の希望に基づいて、経験年数、職能、担当教科、校務分掌等を踏まえた研修を施し、教員としての専門的資質能力を向上させる過程。うち、初任者研修は、初任者に採用当初から学級や教科を担当させつつ、上記の養成段階で修得した「最小限必要な資質能力」を、円滑に職務を遂行し得るレベルまで高めることを目的とするもの。現職研修段階には、このようないわば狭義の研修のほか、教員グループによる自主研修や教員自身の研鑽、さらには日々の教育実践を通じて資質能力の形成が図られる過程も含まれる。また、研修の内容としては、教員としての職務に直接的に関わるものはもとより、視野を広げることを目的とした社会体験研修なども含まれる。

養成段階については、教科指導、生徒指導等に関する「最小限必要な資質能力」について、採用当初から学級や教科の担任を任せられ、教科指導、生徒指導等の職務に支障が生じない資質能力、実践力を身に付けさせることを求めている。

このように養成段階にある大学は、「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う段階であることを認識し、実践的指導力の基礎の育成に努め、教職を体験させる教育実習が、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会となるように充実させていく必要があると考える。教育実習を終えた学生は、その経験から教員としての課題に気づき、事後指導や教職実践演習などの講義が、課題解決の取組と教員としての必要な資質能力について問い直し研究する機会となる。

また、学校現場での実習は、教育に携わることの難しさや厳しさを感じながら、学習指導の分かる授

業を目指したICTの活用、アクティブラーニングによる授業展開。生徒指導では、生徒理解、信頼関係の構築。不登校やいじめ問題への対処方としてのカウンセリング技術など実践的指導力の必要性を、あらためて感じている。

ある学生の教育実習日誌には、初めての授業で挫折感を味わい自信を失いそうになるが、教員を目指す誠実な人柄が生徒や教員との信頼関係を育て、周囲に励まされ教員としての可能性を自ら探ろうと懸命に努力する姿が生き生きと表現されている。

このように、教育実習は、教員を目指す学生にとって自ら課題に気づきそれを克服しようとする機会となっている。そのことは、教育実習までの間に教育の基礎的理解に関する科目等についてしっかり学修し、事前指導や総合演習などをおして理解を深め、その上で事後指導、教職実践演習などの講義をおして、教員を目指す自らの課題について課題解決に取組、研究を深めていくことが必要であると考ええる。

### 3 教育実習の考察

#### 3-1 本学の教育実習の状況

本学において2013年から2017年までの5年間に「教育実習」に臨んだ者は、16名、14名、15名、12名、2名である。例年15名程度であったが2017年度は、2名と極端に少ない人数となった。

##### (1) 教育実習の実習校での評価の方法

教育実習についての評価について考察する。評価項目は、次の7項目である。評価項目欄には、一カ所空白の欄を設けている。これは、実習校で取り上げたい評価項目をあげてもらい評価していただくようお願いしているが、これまでその活用例はない。

##### 1) 評価項目と内容

###### ① 「教職に対する自覚」

職場に対する自分の考えを常に問い直し、実習を通して教職に対する自覚が深められたか。

###### ② 「生徒一人ひとりの価値の尊重」

生徒一人ひとりの願いを感じとり、その可能性の実現に向って、常に努力していたか。

### ③ 「他者の理解と自己の変革」

指導教諭をはじめ教職員や仲間の実習生に対して常に心を開き、理解しようと試み、そこで学んでいく事柄を自分の実習に生かそうとしたか。

### ④ 「教材研究」

教科内容について学問的な研究を深め、それを基礎にして教材を選択し、創意的に授業計画を立てようとしたか。

### ⑤ 「授業展開」

生徒の表情や発言を的確に理解しながら、適切な発問・説明・板書などによって意欲的な学習を展開させようとしたか。

### ⑥ 「生徒の集団活動の把握と指導」

教科以外の生徒や学級の諸活動に積極的に参加し、自治的集団活動の教育的意義を理解しようとしたか。

### ⑦ 「事務・実務能力」

学級経営上の事務処理などが的確にできたか。実習記録や書類などを期限内に作成し提出したか。

そしてこれに「総合評価」が加わる。

各項目、A：優れている。B：十分努力した。C：いま少し積極的な実習への取組が望まれる。D：実習の効果が見られない。の4段階で評価していただいている。

## (2) 評価結果の調査方法

調査は、最近の状況を観察するために、平成26年度から本年度まで教育実習に参加した学生43名について行った。A～Dを点数化して考察するために点数の設定は、小さな数値で分かりやすく、実習に参加した時点での評価を1点としてDからAまで順に1～4点までとした。個人の評価項目合計点を出す方法と全体の評価項目ごとの平均点を出す方法で調査を行った。

### 1) 個人の評価項目合計点

オールAの28点を最高に一番低い点数の者は、18点であった。Dの評価がある者はいなかった。

28点の者は、全実習生(43名)の内7名(16%)、実習先の校種は、中学校が4校、高校が3校であった。

総合評価がAであった者は21名(49%)、Bであった者は20名(49%)、Cが1名(2%)。点数が低かった者は、18点が1名(2%)高校での実習体験

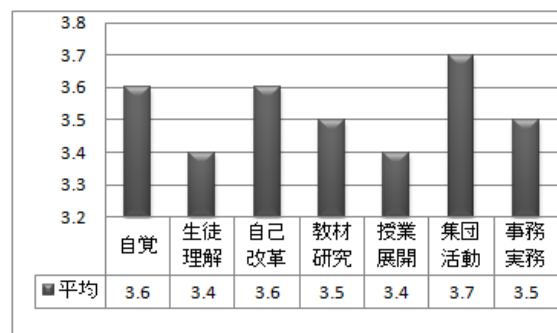
者であった。19点が2名(5%)中学校1名、高校1名であった。

点数が低かった実習生は、教育実習というはじめての経験に動揺し学修してきたことを十分に発揮できないままに終わった学生もいる。教材研究や指導案作成に囚われ生徒とのコミュニケーションが疎かになったり、日誌の提出が遅れたりと苦勞していたようだ。これについては、学生の教材研究や指導案作成のスキルアップを図るために、教職課程担当者が相互に連携を図る取組が必要であると感じている。

一方、高い評価をいただいた実習生の傾向は、実習日誌での指導教諭のやりとりから、実習に取り組む姿勢が懸命であり真摯である。実習が始まり数日後、板書や発声の方法について指摘を受けた実習生が、空き時間や勤務終了後に板書の練習を懸命に行い、数日後改善が見られた。また、報告、連絡、相談が徹底されており、指導教諭を信頼している様子も見られる。これらの学生は、日頃の学生生活においてもメモを取る習慣があり、状況の変化にも対応力がある。

## 2) 全実習生の評価項目ごとの平均点

①自覚3.6点、②生徒理解と価値尊重3.4点、③他者理解と自己変革3.6点、④教材研究3.5点、⑤授業展開3.4点、⑥集団活動の把握と指導3.7点、⑦事務・実務能力3.5点となった。そして、総合評価は、3.4点であった。



＝グラフ1 点数化したグラフ＝

## 3) 上記(2)の調査結果と実習日誌などの学生、指導教諭のコメント

### ① 「教職に対する自覚」(3.6点)について

教員を目指して自問自答し奮闘する姿が「事前・事後指導」での実習体験感想文から読み取れる。

以下の斜字体文は学生の実習体験感想の一部である。

はじめての授業では、準備したものを上手に使えず。声量、時間配分など問題点が多かった。しかし、空き時間などを利用して、繰り返し模擬授業を行い少しずつ改善され実習が終わる頃に指導教諭に評価していただいたことが自信となった。

指導教諭の評価では、

生徒と積極的に関わる姿が見られた。また、反省を踏まえて次の授業ではしっかりと改善できていた点も評価できる。

## ②「生徒理解と価値尊重」(3.4点)、④「教材研究」(3.5点)、⑤「授業展開」(3.4点)について

これら②④⑤は、授業を行う上で最も大切にしなければならない項目である。②学級の生徒との信頼関係づくりができたか(学級の実態把握)。④指導する教科の十分な教材研究ができたか(授業設計)。⑤生徒の反応を的確に捉え適切な発問・説明・板書で授業を展開できたか(授業力)。この3つがバランスよく備わってこそ、しっかりとした授業が展開できると思っている。講義でもこれらを踏まえて授業力向上に取り組んでいるところである。ところが、この3項目が3.4点～3.5点の間となり低い評価となった。

## ②「生徒理解と価値尊重」(3.4点)について点数の内容を分析してみると、

調査した教育実習生43名の内、Aの評価を受けた学生が19名、B評価が23名、C評価が1名である。点数にすると、Aが76点、Bが69点、Cが2点、計147点となり、平均3.4点(147点/43名)となった。

A(優れている)とB(十分努力した)の評価で見るとC評価を受けた者は1名であり、B以上の評価を受けた者が98%(42名)であった。④と⑤の項目についても同じ内容の結果であった。ほとんどの教育実習生がB以上の評価であったが、子どもたちを心豊かに育てることのできる優れた資質能力と実践的指導力を有する教員の育成のためには、学生自身が、常に教員としての資質能力や実践的指導力の向上を意識して自己研鑽する態度も身につけさせたい。

## ②「生徒理解と価値尊重」(3.4点)

生徒との信頼関係があつてこそ授業は成り立っていることへの理解が足りないと感じた。

実習生の何人かは、教育実習の始まった2・3日は、緊張感もあり生徒との信頼関係を心配しながらも教材研究や指導案作成にとらわれ、生徒との関係づくりが清掃時間やショートホームなど限られた時間だけであった学生もいた。「工業」や「数学」を希望する学生によっては、教育実習開始直前の打合せ時に実習担当の教科を告げられ準備にかかる者もいた。改善方法の一つとして、実習校との事前の連絡体制を大学と実習校間で取り対象学生に伝える形を取りたい。また、今後は、教材研究や指導案作成について、更にスキルアップを重ね、実習校の生徒と余裕を持って積極的に関わることで、生徒理解につながり充実した授業の展開になることを理解させ、指導力の向上を進めていきたい。

実習生なりに積極的にコミュニケーションを取り信頼関係を築こうとするが、緊張感も伴い生徒理解に至らなかったことが反省文でにあった。

休み時間や給食の時間など、生徒とのコミュニケーションを取れる時間は、積極的に生徒とかわるようにした。実習初めの頃は、緊張して会話することができず。授業中の生徒への指示もできずいた。実習半ばには、お互いになれて生徒の方から声を掛けてくれるようになった。

## ④「教材研究」3.5点

本学では、学生が所属する学科の専門的事項について、工学基礎概論など工業全般にわたる基礎学力の定着を図っている。教職課程の関連科目の担当者が連携して模擬授業などを実施し、教材研究についても取りまかせスキルアップを行っているが、実習生のなかには、思うように実践できなかった学生もおり、厳しい指導を受けた学生もいた。

指導教諭の評価より

休み時間などを利用して、生徒と接する機会を増やそうとする姿勢は評価できる。しかし、肝心の教科の知識や教材研究が不十分であった。

このようなご指摘は、真摯に受け止め、教科の指導力向上に努めたい。教職関係科目との連携を密に取り、指

導教科への基礎基本の習熟度や学力向上に努めさせ、更に、教材研究や指導案作成についてスキルアップを重ね授業力の向上を行いたい。

### ⑤「授業展開」3.4点

「生徒理解」「教材研究」とともに点数が、低くなった。「教員は、授業が勝負である。」と言われる。

教材研究を十分にを行い、生徒の能力や学級の状況を授業参観などをとおして観察し、授業設計に反映させるなど、授業展開の基本的な技術を修得させ、学習指導案作成や授業力向上のスキルアップを図りたい。

また、「事前事後指導」をはじめ関係科目での模擬授業を実施しているが、その方法や在り方に課題があると感じている。模擬授業は、講義を受けている仲間が生徒役となり実施される。はじめのうちは、緊張感があっても、馴れてしまう。一人当たりの模擬授業の時間は15分程度である。教職課程の担当が連携して取り組み、学校で行われている実際に近い形で模擬授業を行い、互いの授業を参観するなど充実した取り組みを実践したい。

### 学生の教育実習の反省文から

自分が思っていることを伝えるのがこんなにも難しいのかと痛感しました。それと同時に思ったのが、私が今までに受けた授業で分かりやすい授業は、先生の教材研究や生徒の分析など、ありとあらゆる努力の結晶なんだと思いました。

### ③「他者理解と自己変革」(3.6点)について

実習生が、他の教育実習生の授業やベテラン教師の授業参観をとおして良い点を参考にしようとする姿勢が実習日誌にあった。

同じ実習生の授業を参観する機会があった。2回目とは、思えない完成度で声も大きく、後ろにいても聞き取りやすかった。

### ベテラン教師の授業を参観する姿

1限目、2限目に数学の授業を参観させていただきました。黒板の使い方、指示の仕方、説明をするタイミング、生徒の活動のタイミングなど間の取り方などとても参考になりました。

### 指導教諭の評価面より

多くの教師と積極的に関わり、それぞれの持ち味を吸

収しようと努力する姿が見られた。

### ⑥「集団活動の把握と指導」(3.7点)について

評価項目の中で高い点数となった。「事前・事後指導」などの授業では、「凡事徹底」「率先垂範」「礼儀や言葉遣い」「指示は、全体を見て、自信のある大きな声で」「積極的にコミュニケーション」など指導している。また、教育実習に参加する学生の多くは、日頃からサークル活動に参加している者が多く、協調性やリーダーシップが発揮できたものと思われる。

### 教育実習日誌より (体育祭の応援ダンスの練習)

・・・相当行き詰まったようで終始ピリピリしていました。悩んでいる生徒や泣き出す生徒も何人かいました。こういう事態の時、どのように係われればよいのか考えさせられました。練習最後には、ある程度解決はできたようですが、納得していない生徒がいたので、今後の練習日程の中で介入しすぎないように気をつけて指導してゆきたいと思います。

### 指導教諭の指導助言より

生徒間の意識の違いが表に出てくるときです。生徒の話をよく聞き生徒自身で解決させるようにしましょう。

### ⑦「事務・実務能力」(3.5点)について

学生は、実習をとおして生徒と関わる中で「生徒指導論」「教育相談」などの教職課程で学んできたことを実践する機会を得たり、また、教員が授業以外にも様々な仕事をしていることも具体的に観察することができた。この経験をとおして、教員の教育に対する熱意が教育現場を支えていることに学生が気づいてくれたことが収穫である。

### 実習生の「実習から新たに学んだこと」から

先生の仕事は、出席簿の点検、学級日誌の確認と添え書き、生徒との相談など忙しく感じ大変だと思った。

校長先生から「自分の仕事だけにとらわれず、子どもが好きだという気持ちと教員を目指した原点を忘れないように」と教えていただいた。

先生方が生徒が好きで、生徒の成長を思う熱意があるからできる仕事だと感じました。

### ⑧「勤務態度」について

実習を受ける態度や教師としての資質について勤務態度を出勤簿、総合評価、総合所見を参考にした。「出勤簿」には、遅刻、早退、欠席は、無かった。「総合評価」がAであった者は21名(49%) Bであった者は20名(49%)、Cが1名(2%)。「総合所見」でも、特段、勤務に関する厳しい所見はなかった。

指導教諭の実習日誌の所見には、「陰ひなたなく懸命に取り組む姿に好感を持った。」という内容のコメントが多かった。これは、学生の成長はもとより、教職課程の担当者が連携して教員としての誠実さや社会人としてのマナーについて共通の認識で、継続的に指導を行っている成果の現れと感じている。

#### 4 おわりに

実習日誌をとおして指導教諭の実習生に対するコメントは期待感を込めた厳しい指導であり励ましであったりする。また、実習生も教育実習に真摯に向き合い教師としての力不足を身にしみて感じた期間でもあったようである。初めて教諭として生徒を目の当たりにして教育実習に取り組む自分と向き合い、ベテラン教諭の授業参観などを経験し、教員としての資質や能力、実践的指導力について思い知らされ考えさせられた期間でもあった。その中で、自ら気づいた課題を実習後の「事前・事後指導」「総合演習応用」等において、教員を目指した課題解決の研究に取り組み、自己研鑽に励む姿は、教育実習で関わった生徒や先生方とのふれ合いから生まれた絆が教師への使命感を駆り立てているように思えてならない。実習校の学生への誠意あるご指導に感謝の気持ちで一杯である。

また、教育実習日誌から学校現場では、教育改革の取組が始まっていることも知ることができた。授業で小グループが編成され、グループごとに、課題について話し合いを行い、それを、まとめ発表するなどのアクティブラーニングが見られた。それ以外にも情報機器の効果的な活用について指導する指導教諭の所見もあった。

大学でアクティブラーニングやICTの効果的な活用について教職課程の担当者が連携して、模擬授業などとおして実践的な取組が必要であると感じた。情報機器の基本的な操作から効果的な活用について実技指導なども行い取り組んでいきたい。

#### 5 謝辞

それぞれの実習校で校長先生をはじめ、ご指導いただいた先生方、誠意あるご教示に改めて感謝申し上げます。教育実習に参加した学生は、先生方や生徒との関わりをとおして生きることへの謙虚さ、周囲への感謝の気持ちを学ぶことができたと思っています。学生は、期限付きの教員となって教員を目指す者、また、別の道に進む者といいましたが、教育実習が終わって大学に戻ってきたときには、晴れ晴れとした達成感のあふれる表情でした。全員が、教員になりたいと固く決心をしていました。企業に進んだ者もいましたが、教諭としての技術力と知識を身につけ、先生方の恩に答えるべく、将来的に、教員としてその道を歩んでくれるものと私たち教職課程担当者は期待しております。

さて、本研究を行うに当たり、次の文献を参考に研究を進めさせて頂きました。示唆に富んだ内容は、多くのことを学ぶことができました。また、知識の視野も広げることができました。心から感謝申し上げます。以下に掲載し感謝の意をお伝えいたします。

ありがとうございました。

#### 引用・参考文献

- 1 平成8年7月 中央教育審議会(第一次答申)
- 2 平成9年7月 教育職員養成審議会(第1次答申)
- 3 平成10年12月 教育職員養成審議会(第3次答申)
- 4 平成27年12月21日中央教育審議会(中教審第184号)
- 5 平成27年5月14日(教育再生実行委員会) これからの時代に求められる資質・・・(第七次提言)
- 6 「教師論」[第2班] 教師を志す全てのひとへ 教職問題研究会編 宮崎和夫、前原健三
- 7 「これからの学校教育と教師」 佐々木司、三山 緑 編著 櫻田裕美子 上寺康司
- 8 「新教師論」 小柳和喜雄、久田敏彦、湯浅恭正、山本順彦
- 9 筑紫女学園大学「教育実践研究」第3号《教育実習指導上の留意点に関する考察》竹熊真波 筑紫女学園大学実習支援センター文学部アジア文化学科